

くノ一淫闘帖

下巻 天正秘録編

二次元ドリームノベルズ/PDF立ち読み版

小説 綾守竜樹

挿絵 B-RIVER

卷ノ五

餌葉自縛

007

卷ノ六

為淫理枝

067

卷ノ七

絹林淫獄

153

卷ノ八

常世之夢

203

卷ノ結

262

登場人物紹介

Characters



ともえ

巴

伊賀忍百地衆、「百花忍軍」に属すくノ一。棒手裏剣を得物とし、房術にも秀でるが、現在は子壺に壺憑之蟲を宿らされた身。

あざみ

薙

伊賀忍百地衆、「百花忍軍」の頭領。「蘭麝風」と恐れられるくノ一。巴を逃がすために自ら囮となり、桑羅に囚われてしまう。

すみれ

重

桑太に飼娘として隷属する甲賀房車衆のくノ一。傀儡紐の使い手。

くわた

桑太

巴を自分の飼娘にしようと画策する蟲忍。しかし、逆に彼女に手傷を負わされてしまう。

くわら

桑羅

蟲忍の総代。

(……だめええつ)

甲高い声が、

「……っ……っ……っ……」

——あ、よく途中で止めたわね。

「……っ、う……うう、うあ、あああ……」

瘤が穴から抜けていく。まるで千叟ちびきの岩が除かれたようだった。縄目は小陰唇をあられもなく引きのぼしっつ、縮こまった会陰部を削いでいく。

——おめでとう、何とか凌いだわね。

魂が抜けていくような吐息。

——でも、また来るわよ。

「……ひい」

——ふふふ、内腿がどろどろ。膝と水面のあいだに、銀色の線が引かれているわ。そうよね、本来なら頭が空っぽになるくらい、イッてもおかしくないものね。

「い……っ……っ……っ……い……」

——さすがね、また堪えたわ。

魂が抜けてしまったような吐息。

——でも、まだまだ続くのよ。



「うひい……ひいつ、あひい……」

縄に食いこまれ、縄目にくじられる。決して途切れることのない痛痒と、決して終わることのない按摩。巴は声を殺して、号泣していた。自下の髮穗が、散りぎわのしだれ桜よろしく揺れている。

(……あああ、だめっ、こっ、声っ……声だめっ、だめだめだめ……)

曇り空ではあるが、うららかな春の午後だ。伊賀の山腹、爽やかな緑ときらびやかな川に囲まれた宙。鳥たちの鳴き声が聞こえる、滝の轟きが響いてくる。まさに故郷を連想させる美景のなかで、巴は淫らな縄に跨せられ、女陰を虐めに虐められ、空中悶絶をくり広げさせられている。

「……あひい、ひいつ、いあ……いあ……あ……」

お漏らしのように恥蜜を垂らしていた。落雷に撃たれたかのように手足を伸ばし、断末魔のように痙攣させていた。首を振りすぎたせいかわ、鎖骨が軋んでいる。耳がちぎれそうだった。險越しでも光が見えた。瞳がどこかに飛んでいきそうだった。要するに、(だめっ、だめなのっ、声っ、だっ、出したらあ、だめなのにい、なのにいっ)もう駄目だった。

「……あーっ」

「哭いたなア」

「ふふふ、無様な声ですわね」

「んー……違うなア」

「え？」

「コレはまアだ、イッくらんで……全面降伏には、まだ至っくらんようやなア」

巴は唇を噛もうとした。

無理だった。磁石でも仕込まれているみたいに、上顎が跳ねあがっていた。

(……だめええっ、きつ、聞かれるっ、見つけられるっ)

肺がしぼみ、喉が震える。その微細な体内感覚が、このうえない解放感をもたらしてくる。涎がほとばしり、舌がめくれ返った。解放感が、さらに高まっていく。

「あーっ」

木の葉の囁きを押しわけ、小鳥たちの合唱をかき消し、川面のおしゃべりと縄の軋みを伴奏にして、屈伏の歌が響いていった。温い風が吹いている、タニギキョウの香りが漂っている。

(だめっ、ああっ……み、見つかるっ、あーっ、みつ、見つかっちゃうっ)

嬌声を漏らすたびに、混じりつけなしの恐怖が込みあげてくる。心臓に氷柱を突きたて

られるような心地が、深々と刺さってくるのに、

「あああ、どっ、どうし……どうしっ、てえ……」

それがいつその陶酔をもたらすのだ。

「……あーっ」

女唇に食いこまされ、口唇で解きはなたれる。窮屈と安楽が、瘤ごとに入れかわった。混濁する、自他の境目が曖昧になる。己が為さなければならぬこと、為してはならぬことがしたり顔を浮かべながら、互いに錯綜していく。

——あらあら、混乱しているわね。仕方がないから、手助けしてあげるわ。己がしてはならないのは、ただ一つ……イクことよ。

正体不明の声が、甘言を囁いてきた。

「ああっ、ああ、あああ……」

そう、それは確かに禁忌だ。「イク」のは、絶対にしてはいけないことだ——巴は幼子のように頷いていた。性悪なヤツだと思っていたが、この声もたまには良いことを言う。ただ、それ以外にも何かあったような気がするのだけれど、

——気のせいよ。他には何もないわ。それに、もしあったとしても無理でしょう。己にはもう、我慢できる余力がないでしょう。

そうだろうか、そうかもしれない。

——そうよ。だからほら、思いつきり声を張りあげなさい。イカなくてもすむように、心ゆくまで吐きだしてしまいなさい。

正体不明の声が、含み笑いを漏らした。

——此刻声を忍ぼうとしたら、すぐにでもイッてしまいそうでしょう。でも、それは駄目よね。それだけは、絶対に駄目だったわよね。

「……ああ……ああ……」

そうだ、イッてはならないのだ。

それを避けるためには、どんなことでもしなければならぬ。

だから、哭いてもかまわないのだ。たとえ蟲忍たちに見つかってしまったとしても、

「……あつあつあつ、あーっ」

それは仕方がないことなのだ。

——そう、仕方がないのよ。さあ、大きな声で叫びなさい。

「あーっ、あーっ」

——もつとよ、もつと大きな声で哭くの。己のなかに溜まっている昂ぶりは、こんなものではないでしょう。我慢してきた疼きは、こんなものでは済まないでしょう。もつと凄いでしよう、もつと恨めしかったでしょう。

「あーっ、すつ、すごいつ、すごひいっ」

——その調子。さあ、股を繩に擦りつけるの。手すりがあるのだから、それを手繰^{たぐ}つていけばいいわ。結び目に向かつて、己から腰をぶつけていくの。

(そ、そんな…そんなつ、こつ、ことお……)

——躊躇している暇なんてないわ。ここは川のうえ、早く渡らないといけないでしょう。股を繩に擦りつければ、その分前に進むことになるのよ。

「あああ……ああ……」

——まるで自慰に興じているみたいだけれど、それは表向きの姿。己の本心は、己が一番よく分かっているでしょう。

巧みだった。我慢のほころびをあざとく突いて、優しげな声は狡猾に、足掻く女を奈落の底へと引きずりこんでいく。心の視野狭窄^{きょうさく}に陥っている巴は、それが一度おりた坂であることに気づけなかった。

己は、踏んばっているのだ。

悲鳴じみた嬌声をほとばしらせているのも、あくまでも耐えるためなのだし、股を繩に擦りつけようとしているのだから、その一環に過ぎない。己が気持ちよくなりたいたいからするわけではない。決して、絶対にそんなつもりはない。

震える手首に力を込めて、痺れ気味の肘を曲げる。腕の力で少しだけ前にずると、繩がより深く肉溝に食いこんだ。その分だけ瘤が厳しく、激しく肉芽と衝突していた。

「あたるっ、あーっ、あたるっ、あたるううっ」

自らくり出す腰の浮き沈みと、結び目に潜られることで生じる腰の跳ねあがり。どこもなく滑稽でありながらも生々しい舞踊が、縄の橋を上下に揺らしている。

——そうでしょう。当たって気持ちいいでしょう。

垂れさがった足が、敗軍の旗指物しほりものよろしく振られていた。足の親指側が、水面から跳ねた魚の腹よろしくきらめき、爪先から川面にむけて愛液の滝を流している。

(あああつ、いッ…い、イキそ…)

ヒタヒタと忍びあがつてくる絶頂。

(…あああつ、だめっ、そっ、それはだっ、だめなのおっ、あああ…)

粘っこくて熱い触手を持つそれは、内側から巴の頬を叩き、いもなく鼻先を舐め、必死の形相を嘲笑った。生まれたときから植えつけられ、胸囲に応じてはびこっていった「女」がみるみる、触手の唆そそかに懐柔されていく。

「だめええっ、いッ、イクのだめええーっ、ああっ、イッ…ああーっ、だめーっ」

内なる「女」を止めるには、己で呼びかけるしかなかった。声を忍ばねばならぬという禁忌を、巴は完全に霧散させていた。ただひたすら、ツバ迫りあいにも似た切迫感に支配される。窮屈と安楽の両極を、振り子みたいに往復させられる。実感していた。己が「女」であることを、濃密に擦りつけられていた。

「お聞きになられましたか、あの情けない悲鳴……ふふふ、『イクのだめえ』ですって」

「エエなァ……巴はんったら、なしてこないに、儂を燃やしてくれるんやろなァ」

「……………」

「……お、どうやら渡りきれたようやな。ほれ、儂の言つた通りやつたろ。巴はん、結局
忍びきつたで」

「……………」

「どした、悔しいんかァ……まあ、おまえは岸まで達せなんだから分からんやろけど、コ
レからが本番なんやでえ」

「…………え」

「言うたろ。繩に亜麻仁油と媚毒う、たァんと染みこませてあるって」

「それでは、あのくノ一の股座は……」

「そうや。たつぷりとエエ気持ちの素オ、塗りつけられたワケや。しかも繩擦れしとるか
らなァ、猛烈に……くひひ、痒うなるんよ」

「……………」

「ココからが、股哭きの刻限じかんや。愛しの巴はんは……ガマンできるかなァ」

気が付くとスギの幹だった。

※

巴は繩橋から転げおちた。膝丈の下草に、まる見えの尻から着地する。擦り続けられたせいで禪が振れ、ほとんど繩と化していた。もちろん、前も同様の痴態を強いられており、細身のまわりを蜜濡れた恥叢に囲まれていた。

「だめっ、だめなのお……いっ、イク……のはあ、だっ、だめ……ああっ、だめえええ……」
生汗びっしよりの女肌。涎まみれの口が、疲弊の極みとも恍惚の手前とも取れるたるみをさらしながら、死にかけの金魚になっていた。焦点の壊れた瞳が、涙に追いたてられるようにさまよっている。

「ああああ……」

淫らな罾から逃れ、強制的な絶頂もかわしきった。

だが、大声で喚きちらしてしまった——己の居場所を、これでもかとはばかりに明かしてしまつたのだ。すぐに離れねばならぬ。できるだけ、ここから遠ざからねばならぬ。此刻の己には、仰向けに寝転がっている暇などないのに、

「……あああ……ああっ、お、おかしひい」

動けなかった、立てなかった。軽く膝を浮かせ、思いきり股を開いた痴態のまま、巴は荒い喘鳴ぜんめいをくり返していた。

「お、おかひい……あ、あそこつ、あそこがあ……ああつ、おか、おかひいよお……」

女陰が、熱い。

熱くて痒い、痒くて甘い、甘くて熱い。熱くて痒くて甘くて、とどのつまり爛れていた。腰のあたりについていた手を、腫れぼったくなつた股間に向かわせる。人差し指が足の付け根、洪水のほとりに達した段で、巴は悟りの落雷に撃たれた。

(……触ったら、終わりだ)

それはまさしく、埋み火に枯れ葉をくべる行為だった。間髪入れず燃えさかり、天まで焦がすことになるだろう。その火柱の勢いまで、まざまざと想起できた。

(終わり……一巻のお終いだけれど……)

この指で陰唇を掻きわけたら。

熟れすぎた果肉のような溝に、指を潜りこませたら。思うさま掻きまわしたら。

さぞや気持ちいいはずだ——丁寧に炙つた肉を、ゆつくりと噛みしめている刻限のように、えも言われぬ甘美がジワジワと、そう、ジワジワと染みこんでくるだろう。肉襞を摘んだりしたら、もう泣くしかあるまい。姫芽をさすろうものなら、死にたくなるほどの快美に撃たれるに違いない。

「……ああ……だ、だめえ、ゆ、ゆびい、だめえ……」

ひと掻きで充分。耳垢をほじるより微力でいい、針に糸を通すより鈍くていい。それで

も、指紋の凸凹まで感じうるはずだ。目にも見えぬような段差に歓喜し、尻毛から睫毛まで震えてしまうはずだ。

「……だめっ、ゆ、ゆびい、とまれっ、ああっ、と、とまれえっ、とっ、とまっ……」

瞼の裏に、幻像が映しだされた——ましら猿よろしく指遊びに耽る己。両手で肉溝を広げ、両指を深々と突きさしている痴態。分かる。これがもうすぐ、現うつになつてしまう。

「……とっ、とまつてえっ、あああ、おねがひいっ、ゆびっ、ゆびいっ、あああ……」

——あらあら、何を騒いでいるのよ。

またもや、あの声だった。

——まったく、さもらしいことをほざいているわね。それは己の指でしょう、己がしていることでしょう。

「……あああ……ああ……」

——そうやって、いつもいつも他人のせいにして。隠れ里の檻では「桑佐くわさのせい」にできたけれど、此度は無理よ。いいこと、これは自慰よ自慰。己は、己の躰でもって、己の心を慰めようとしているのよ。

指先が恥毛に触れた。股布を除けた。

——止めたいなら、止めればいいのよ。でも熱いわよね、痒いわよね。軽く穿るだけで、その苦悶から救われるのよ。さぞ甘いでしょうね、とても気持ちいいでしょうね。

巴は目をつむり、歯軋りした。後頭部を浮かし、踵を舞わす。最後の抗いとばかりに、首を振った。鼻をすすりながら、自問する。

(どっ、どうして……どうして……)

どうしておまえは、禍々まがまがしい誘惑を垂らしてくるのだ。どうして、女の脆さを詰むつてくるの。どうしてそんなに、屈伏の甘さを唆してくるのよ。

——あら、おかしなことを言うのね。ふふふ、どうしようもないことを言うのねえ。

中指が大陰唇を跨いだ。浮きでた汗をすくった。

——だって、「己」は己ですもの。

人差し指が小陰唇に触れた。

「……あーっ」

——「己」は、己のなかの「女」。

指先が粘膜を撫でた。淫慄きを擦った。

——洞窟の仕込みで開花した、本当の花。

「あーっ、あーっ……ああっ、だめえっ、ゆっ、ゆびい、だっ、だめなのに……」

——虫と蟲忍たちによって覚醒めさせられた、己の本性よ。

腰が跳んだ、顎が跳ねた。剥きだしの乳房が勢いよく揺れた。爪先が地をえぐり、舌先が宙を搔いた。新たな涙と蜜が、緑の草叢に飛びちった。

「……イックウウウウッ」

「くひひ……やっぱりい、ムリやったなア」

「桑太さま、足下にお気をつけくださいませ。こちらの岸は、岩があるようですから」

「おーおー、巴はんつてば、エライガッツいとるなア。ものスゴい勢いや……女陰つてのは、あないに穿りまわして大丈夫なんかア」

「かまいませんわ。しかしあのくノ一……かなり下手ですわね。女責めに慣れた指運びとは、とても思えません」

「そりゃ、そうやる。巴はんらはア、荒事と男誑たらしのくノ一やったんやから……甲賀の房ぼう事衆じしゅうとして、色仕掛けを極めたおまえとは礎いしが違うわい」

「あんな未熟者……董とうなら、瞬きのあいだに白目を剥かせられますわ。もしくは、永遠に焦らすこともできますわよ」

「ほうか。くひひ、まずはそれでいこかなア」

穿る。

「あーっ」

ふやけそうな襷。弄くる。

「……いつ、イクッ」

エイの鱭ひれのように波打った。擦る。脈打つ粘膜。搔く。ほとぼしる蜜。えぐる。

「イクッ、イクイクイクウッ」

左手。肉の溝を掘る。人差し指。掻きだす。中指。掘りすすむ。薬指。掻きまわす。

「あーっ、イクッ、イクイクイクッ、あーっ」

右手。溝の縁を撫でる。薬指。クニユクニユ。中指。グチユグチユ。人差し指と親指の交点で出会う。痲りきつている芽。摘んだ。肉の真珠。揉んだ。

「イクッ、いッ、イック……うああッ、あーっ」

穿る。気持ちいい。擦る。堪らない。撫でる。絶頂感。えぐる。翔ぶ、高みに翔ぶ。弄る、廻る、瀆す。気持ちいい、堪らない、果てを垣間見る、いい、気持ちいい、凄く気持ちいい。もうだめ、どうしようもなくいい、

「あーっ、いつ、イッちゃやう、イッちゃ……イクッ、イクイクイクウッ」

「うふふ、ホントに夢中で掘っていますわねえ。こんなに近づかれていますのに、気づいていない……いえ、気づけないようですわ」

「せやなあ、完全にのめり込んだるなア。なんともまア、気持ちよさそうなカオや……儂らも少し、鑑賞させてもらうかア」

気持ちよかった。指が気持ちよかった、関節の凸凹が気持ちよかった、肌と爪の違いが気持ちよかった。

「イクつ、イクク……あーつ、とつ、とまら……ああつ、イクつ、イクイクイクうつ」
恥骨が叫んでいる。背が軋みそうに折れた。股座と腰の裏が、真つ赤に染めあがつていた。首筋に腱が、こめかみに血管が浮かびあがる。

「イク、イクてる、イクて、ああつ、イクてるう、イクてるウのおおつ、またつ、まつ、またイツちやうのおつ、またイツ……あああーつ」

——イクのは厳禁だつたはずだ。

真つ白な閃光の狭間に、思ひだしたように影が差した。

——思ひだせ。イツたあげくに喚きちらすなど、絶対にしてはならなかつたはずだ。

そうだと巴は思うともなしに応えていた。そうだと。しかし、それが何だというのだ。この気持ちよさが味わえるなら、禁忌など知ったことか。

——蟲忍たちに見つかつてしまうぞ。

それがどうした、こんなに気持ちよいのだ。

——牢獄では我慢できたではないか。

昔の巴と此刻の巴は、まったく違う。この心身は初御饌はつみけに供えられ、女の悦びを教えこ

まれたのだ。蜜味を湛^{たた}えた肉として、存分に耕^{たが}されてしまったのだ。

——くノ一なのに、百花の一輪なのに。

だから何だというのだ。そんなものは、何の関係もない。

(……それは違うわよ)

輻^{ふくそ}輳するざわめきを突きやぶって、あの声が、いや「己」の声がした。「己」と認めさせられてしまった此刻、この声を見無視することは、もはやできそうもなかった。

(違うのよ、大いに関係があるのよ。そんなだからこそ……)

恥ずべき秘密を漏らしているかのような、湿っぽい囁き。見えない舌で、鼓膜を内から舐めまわされているがごとき違和感に、意識の一滴までもが吸いよせられる。

(……だからこそ、イケるのよ)

巴は一瞬、惚けたように指を止めた。

(だから、イケる……だからこそ、イクのよ)

爪のあいだに、蜜が滲みこんでくる。じくじくと蝕まれていく。

(イクの、イケるの、ああ、イク……だ、か、ら、どこまでもイケるのよ)

指が再び、死に物狂いのシャクトリムシに戻った。ぎこちなく固まっていた顔貌が、溶岩の噴出を思わせる勢いで蕩ける。鋭かった眉は芯を失い、凛々しく吊りあがっていた目は淫欲の重みに碎かれて、なす術もなく淫慄していた。周囲を見張っていた瑠璃の瞳が、

随喜の涙に溺れる。鼻のしたが伸びきり、下唇が締まりを忘れていた。

「ああああ……」

煮こまれた肉のような秘溝を、悟りを開いた中指がえぐる。

「……い……いつ、イクっ」

膨れあがった粘膜を、淫欲に憑かれた人さし指がなぞる。小骨じみた血管を搔き、火傷しそうな蜜をかき回す。

「イクっ、イクイクイクうっ」

巴は鍛えられた身だからこそ可能な爪先だちになり、盛りのついた獣なみに腰を舞わせた。臍のしたに関節を設えているかのような上下動をくり返し、肌にべったりと張りついていた恥毛まで宙に泳がせる。汗と蜜が小水よろしく飛びちって、イヌの縄張りとして申請できそうだった。

「たっ、たまんなひいっ……あーっ、イッ、イクのおっ、イッちやうのおおっ」

胎内が蠢いていた。肉の筒としての応えが、生々しく伝わってきた。指先に子壺の入り口を感じながら、巴は諦観に近い了解りようげを得ていた。

そうなのだ。

イッてはいけないからこそ、イクのが堪らないのだ。声を出してはいけないからこそ、よがり哭くのが幸せなのだ。くノ一だったからこそ、女に堕ちるのが悦びになるのだ。禁

忌を破るからこそ、かつての己を棄てるからこそ、そうして墮ちに墮ちるからこそ、

「イクっ、イクイクイクうっ」

新たな地平にイケるのだ。華々しく咲きみだれ、白光と化して翔けのぼれる。身も心も砕かれ、骨の髄まですり潰され、魂ごとねっとりとした蜜に変えられて、そして究極の解放感に溺れられるのだ。

(……ほら、ただ「イク」とくり返しても味気ないでしょう。己が享受している悦びは、そんな生やさしいものではないでしょう)

「あーっ……いっ、いいっ、いいのおっ、きっ、きもちいいのおっ」

(それでは「イク」と変わりないでしょう……己ったら、くノ一を辞めるだけでは足りなくて、ただの馬鹿になってしまったみたいねえ)

眉間の奥と目の付け根と瞼の裏、それぞれの階層で火花が散っている。まわりがまばゆく延焼させられ、巴を巴足らしめていたものが、あっけなく灰燼かいじんに帰されていった。猛々しくも甘やかな炎は、余勢を駆って血流に流れこみ、汗の溜まった首筋をくだって、はち切れそうな胸まで焦がし始める。

(仕方がないから、手助けしてあげるわ……さあ、己は何が気持ちいいの)

ドロドロに溶けている意識をすくいあげて、巴はつんのめりそうな思考をまとめた。

「……ゆびっ、ゆっ、ゆびがいいのっ、きっ、きもちいいのおっ」



(そう……では、どうして指が気持ちいいのかしら)

「うっ、動くからっ……なっ、なかで動くからあつ、あーっ、イクっ」

(そうよねえ、なかを掻きまわされるのがいいのよね……ほら、そこよ。中指を使って、そこを引つかかないと。尿道を粘膜越しに挿すられるのが、己は好きでしょう)

「あーっ、あーっ……ああっ、す、すきっ、これっ、これすきいいいっ」

爪の先が、ネズミをいたぶるネコを演じる。わずかな動きが股座を絶叫させ、声ではなく蜜を吐かせていた。鋭く切れあがっている両足が、しなやかな痙攣をさらし、量感たっぷりの内腿を艶めかしくたゆたわせる。

陰阜が信じられないくらい膨れあがり、右の掌を押しあげてきた。巴は敵に殴りかかるときの真剣さでもって、己の恥肉を押しかえし、手裏剣を投じるときの繊細さでもって、ますます己を追いつめた。

「イクっ、イクイクイクっ、イッ……く、イッ、い……ック、イッ……うああああつ」

刺した、深々と突いた、奥の奥まで貫いた。第二関節で子宮をまさぐれそうだった。己の欲望の赴くままに、掻きまわした。イッた。最高だ。イクのが好きだ。イキたい。もっとイキたい、ずっとイキたい。イキ続けたい、イキっぱなしになりたい。

「イッくうううう」

「お久しぶりやなア、巴はん。お娯たのしみんとこワルいなア」

「お初にお目にかかりますわ、巴さん。山の麓ふもとまで聞こえるようなヨガリ声でしたわね」
突然の呼びかけだった。

「……うあ……ああ、あああ」

しかも、殺したはずの相手だった。

「あーっ、なっ、なんでえっ、どっ、どうし……」

巴は絶叫した——その弾みで、爪先が手加減なしに天井をひっ搔いた。

「……いあああああああつ」

イッた。暴力的にイッて、イッてイッてイキまくって、なお突きぬけてイッた。

「くひひ、まアだ足りん、ってカオやなア……安心したってや。儂が味わった痛みに見合
う分だけ、悦び狂ってもらうさかいなア」

「よかったわね、巴さん」

「二度と逃げようなんて思わんよう……徹底的に躰たしなおしたるわいっ」

※

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>